金属総合リサイクルへ

日金、業容を拡大

炉前原料扱い、基本重視

最首社長

千葉事業所

【千葉・横芝光】非鉄を柱にした金属リサイクルの日金（本社＝東京都大田区、最首顕一社長）は、本社ヤードと千葉事業所を拠点に、営業担当の増員や入札対応などから月間取扱数量600㌧規模へと業容を拡充している。

同社は、戦前に創業した老舗で、当初は青銅合金地金生産を手掛け、その後、都区部立地の非鉄原料ディーラーとして地歩を築いてきた。2011年に2億5000万円投じて本社ヤードの約5倍となる敷地面積約3300平方㍍の千葉事業所（千葉県山武郡横芝光町篠本根切22―11）を新設し、2拠点体制に移行した。

同事業所の主要設備は、60㌧トラックスケール、ホイスト（2・8㌧）、プレス（北町機械製）、シャーリング2台、剥線機2台、バッシュをはじめとするアルクフォー1台、フォークリフト4台など。

非鉄スクラップを営業品目の主軸とする方針には変わりないものの、鉄やステンレス、一部輸出向けスクラップの扱いを増やし、総合金属リサイクル業として新たなステージに踏み出している。

扱い構成は、非鉄が1号銅線・上銅・山行きなどの銅系、削り粉・棒コロ・込み中・セパ・コーペルなどの黄銅系、他にも青銅系、リン青銅、被覆電線、サッシをはじめとするアルミ――と全般におよぶ。加えてハンドリングが向上した千葉事業所の稼働により、鉄やステンレス、雑品などの輸出向けスクラップが増加。

仕入れについて足元注力しているのは、青銅系スクラップの母材となる水道メーカーの入札モノ。1回当たりの落札数量が1001200㌔単位になることも多い。

青銅系については創業当時から扱い慣れた点もあるが、やはり受け入れ能力がある千葉事業所の役割が大きく、今後も安定集荷ソースとして、入札案件に積極的に対応していく。

集荷エリアは、以前から関東一円をカバーしてきたが、東京や埼玉とともに地の利を生かして茨城、千葉で増加傾向にあり、さらに福島へと拡大。

現在、入荷したスクラップは全量を千葉事業所で選別加工して管理している。この管理面での強化も、顧客が求めるニーズをにらんだ同事業所新設の目的の一つだった。

炉前原料の販売は、国内向けが80％、輸出向けが20％で直納と商社経由の代納が半々というところ。

月間取扱数量（集荷ベース）は、3―5年前の平均250㌧から600㌧へと底上げされ、次段階の安定期に入っている。

こうした体制を支えているのは、拠点新設効果だけでなく人員面での補強。営業担当者を以前の2人から4人へ、現場要員も本社・千葉事業所ともに1人ずつ増員し、全社で19人。平均年齢は下がってきているが、経験者である幹部も採用し、人材育成を進めている。

また、「非鉄金属を主とするスクラップの切断、圧縮加工、分別保管」の認証範囲で、ISO9001（品質）、ISO14001（環境）の認証を2拠点で取得しており、作業の可視化によってノウハウ継承に努めている。

安定した炉前スクラップ原料の扱いの基本は、「品質」と、顧客との「信頼」。同社では、扱い規模の変化に左右されることなくこの基本を堅持しながら業容の拡充を図っていく方針だ。